発行／一般社団法人
大丸有環境共生型まちづくり推進協会
企画／一般社団法人産業人文学研究所
文／　吉村克己

丸の内
地球環境倶楽部

2009.12.15

No.03

環境サロン
日本文化から学ぶ環境力

高度に発達した科学技術・巨大化した経済・複雑化した社会の課題解決の考え方を
日本文化から獲得し「環境力」を高める試み

Report

「風水思想と古代都市」
～ 環境アセスメントとしての風水

渡邊 欣雄 氏

中部大学国際関係学部　中国語中国関係学科教授

風水は祖先と子孫ともつながる地理だ

私は一九九〇年に『風水思想と東アジア』という本を書き、以来、二〇年以上にわたって風水の研究を行っている。日本では九一年から風水が占いブームとして注目されるようになったが、それ以前は風水という言葉すらほとんど話題になったことはない。しかし、本来、風水は占いではない。

私は風水を「環境アセスメント（環境影響評価法）」と定義している。と言っても、現在用いられているように人為的な建造物などが環境に与える影響を調べる「環境アセスメント」とは違って、「環境が人為的建造物にどんな影響を与えるのか評価する方法」であり、これが本来の環境アセスメントの意味だろう。

風水の考え方は古代中国に発し、周辺諸国や地域に及んだが、自然環境による影響を考えずには計画的な都市設計はできなかったはずだ。日本にも風水の考え方は伝わり、平城京も平安京も設計されている。

風水という言葉はいまから二〇〇〇年ほど前の文献に始めて出てくるが、同じ意味の言葉は四〇〇〇年前からある。「相地」「相宅」がそうであり、宅とは都市のことだ。

二五〇〇年前には『易経』に「地理」という言葉が出てくるが風水と同じ意味だ。この他、「堪輿（カンヨ）」「青烏」「陰陽」などもある。

風水という言葉は比較的新しく、俗語に等しい。正式には「地理」と呼ばれる。つまり、地理学は風水抜きには考えられないと言えるだろう。

風水判断の専門家を文語では「風水師」、口語では「風水先生」と呼ぶ。この他、地方によっては「陰陽先生」「陰陽生」「地理先生」「南蛮子」などの名称もある。

風水思想の特徴は、環境条件が生きている人間だけでなく、死者（祖先）にも影響を与えると考える点だ。そのため、風水ではお墓が中心であり、住宅や都市はその次である。

「気」も風水独特であり、根本理論だ。気の流れが人間や死者に影響を与えると考える。現在、天気や人気という言葉はあるが、「地気」はない。風水では人の気と地の気が同調する場所がよい土地である。

「いい天気ですね」という挨拶は一般的だが、これは「天の気が陽に転じ、自分の気持ちも陽気になる」ことを喜ぶ風水の考え方から発している。

人の気は死者と同じ遺伝子の子孫にも影響すると風水では考えるため、死者への気の影響が現世の人間と未来の子孫の幸せに大きく関わる。特に骨に人の気が凝縮する場所があり、それが土に直接触れる死者は最も気の影響を受けやすい。そのため、埋葬場所は重大なのである。

風水は地形・水流・気候・地質・植生などの自然環境から、陰陽・五行・八卦・天干地支など宇宙の規則的な運行まで含めた判断が必要であり、吉凶禍福を伴うため、この部分だけが占いに転じたのである。

風水から測量技術の基礎が生まれた

風水の原点は『葬経』にあるが、日本語訳の本はまだない。『葬経』では風水の判断項目として以下の五つを挙げている。

①「気」の理論……「葬は生気に乗ずるなり」とあり、埋葬は生きた人の気に乗じて行うべきだと考える。当然、埋葬地はいい土地を選ぶ。

②「蔵風得水」の理論……「風水の法は水を得るを上とし、風を蔵するはそれに次ぐ」とあり、まず大事なのは水であり、水がどのように地を走っているかを見る。第二は風だ。

③「形勢」の理論……「千尺（約三〇〇メートル）を勢とし、百尺（約三〇メートル）を形とす」とあるように、大きな地形と小さな地形が判断のポイントとなる。

④「四霊」の理論……「葬は左を青龍、右を白虎、前を朱雀、後ろを玄武とする」とあり、四神が前後左右を守る。四神のうち、朱雀が平野であり、他は山だ。

⑤「方位」の理論……「土圭（とけい）法でその方位を図り、玉尺でその遠近を度（はか）る」とあるが、方位も磁気も中国の発見であり、測量の基礎は中国が作った。五つの判断項目の中では唯一現代の科学で理解できるものだ。土圭とは測量の意味であり、玉尺とは独特の尺度で、一尺のルート二、つまり、一・四一尺である。

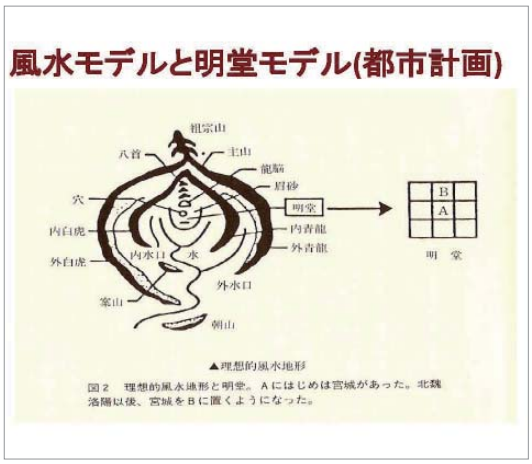

図１　風水モデルと明堂モデル（都市計画）

日本の畳や家具、刀、仏像などの寸法は実はこの玉尺で作られている。だから、伝統的な家具が日本の建物に合わなくなってきたのだろう。

さて、それでは理想の風水地形とはどのようなものだろうか。図1をご覧頂きたい。

風水では山から気が内側に向かって流れ出していると考える。山から「外青龍」あるいは「内青龍」に沿って流れ込み、気が集中するのが「穴」である。都市は「龍脳」と呼ばれる山を”枕“として設計され、穴の下部分が「明堂」という気がたまる”部屋“になる。

気は動かない状態はよくないので、絶えず流れている方がよい。そのため、明堂の両側に川を置き、その水によって気を流す。しかし、気が都市の外に漏れ出てはいけないので、漏れを止めるために近くに「案山」、遠くに「朝山」という山を配して防ぐ。こうした理想の風水地形を探すことが当時の都市づくりの第一歩であったわけだ。

明堂には次の図2にあるように、龍脳と穴に当たる部分に宮城が置かれ、その屋根を一番高くして、だんだん低く作る。その方が気の流れがよくなるからだ。都市空間は左右相似形に作られるが、碁盤目状の設計は風水の影響ではない。むしろ、四角は気がもれるので風水上は好ましくなく、道路を曲げる方が風水に合っている。こうした都市設計は風水モデルから発展した「明堂モデル」と呼ばれている。図2の左側にある沖縄のお墓も風水に則っており、龍脳と穴が最も重要な納骨堂になっている。前方後円墳も同じである。

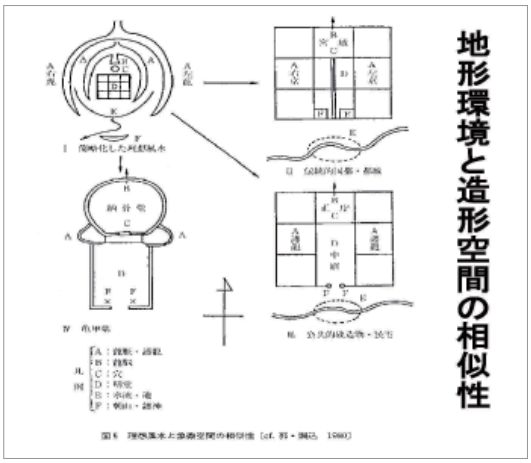

図２　地形環境と造形空間の相似性

日本の古代都市も風水で作られた

二五〇〇年ほど前に書かれた『周礼』の「考工記」には当時の都市計画の基本ともいうべき明堂モデルが記されている。九条の縦断路と九条の横断路によって碁盤目状の九区画に区切られ、皇帝の住まいである宮城は真ん中に、後ろに市場、前に広場を置く。その左には祖先の神を、右には地域の神を祀る。そして、周囲を民家で取り囲む。

明堂モデルはさらに土地管理にも応用され、孟子は「井田制」という国家と土地の管理方法を考案した。九区画の真ん中に公田を置き、周囲の八区画の土地を人民に分配して使用権を認め、八家が助け合って耕した公田からの収穫だけを租税として徴収し、私田には課税しなければ、天下の農夫は集まってくると考えた。

この井田制は日本に伝わり、律令制として実践された。中国でこの制度が行われたかどうかは疑わしいが、日本がやり遂げたことは確かである。

明堂モデルとは違って、風水だけで作られた中国の都市もある。福建省北部南平城では、都市を城壁でぐるりと取り囲み、風水に従って門を開ける。城壁の外を川が左右から流れ、気がもれやすい場所に五重塔を建てている。

福建省長汀城も同様に城壁で都市を取り囲み、その外側を左右に川が流れ、さらにその外側に寺と五重塔を建てている。

沖縄にもこの風水モデルが伝わり、沖縄の風水書には理想地形の村落図が描かれている。ちなみに沖縄でよく見かける松は防風林ではなく、気がもれ出すのを防ぐために各地で植えられた。沖縄

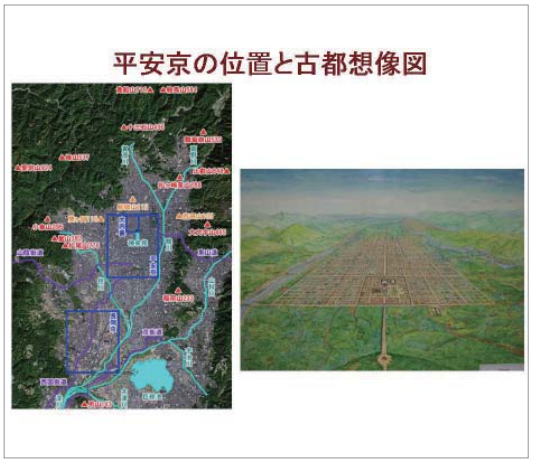

図３　平安京の位置と古都想像図

北部の村落では海岸線に松が並んでいるが、これも気のもれを防ぐ目的である。

このように、古代中国の都市環境は風水によって判断され、理想の土地（風水宝地）とされた場所に、明堂モデルにより都市が造営されることが一般的であった。

『詩経』には周の始祖の一人である公劉のことを詠った「篤公劉（情に厚い公劉）」という詩があるが、その中で、公劉が風水で土地を判断している様子が描かれている。原野を見て歩き、湧き水を調べたり、丘に登ったり、土地を測量したりと、都を築くための風水判断を行っている。

古代中国の代表的な都市である長安や洛陽なども風水によって土地が選ばれている。

日本にも当然ながら風水は輸入されたが、六〇二年に百済から『天文地理の書』がもたらされた際に、この書を推古天皇に献上した百済の僧から日本は風水の知識を学んだと私は推測している。このことは『日本書紀』に書かれているが、さらに六八六年には陰陽師が登場し、風水の専門家として爵位を受けたことが記されている。

日本における国都の造営は、大阪城の近くの難波が最初らしい。やはり『日本書紀』に陰陽師などを六八三年に派遣し、土地を風水で調べさせたと書かれている。

六八九年には高市皇子が藤原京の予定地を風水で調べたことが記されており、その後、天皇も同地を訪れ、風水判断している。藤原京の周囲は耳成山、畝傍山、香具山の大和三山で囲まれているが、これは中国の長安と同じ地形だ。

平城京も風水の記録が豊富で、七〇八年に天皇が語った言葉として、風水で都がどのくらい継続するか判断してきたことや、平城の地が「青龍、朱雀、白虎、玄武の四神に応じた三つの山が鎮座した理想的な土地であり、都を建てるべきだ」ということが書かれている。

図３のように平安京に関しても、七九三年に大納言を遣わして、新たに都を建てるために宇太村という村落を移させたとある。その地形は山と川が風水の理想に近く、自然がそのまま城（都市）になっていると桓武天皇が風水判断をしている。

鎌倉期の『平家物語』の中でも、平安京が「四神に応じた地形で、帝都を定めるにふさわしい土地である」と描写されている。

このように、東アジアにおいては生気の流れのある「流動空間」としての都市、村落、住宅、墳墓の構築こそ、理想的なコミュニティであり、その実現のために国策として風水が活用されてきた。

風水は決して占いなどではなく、当時の最先端の科学が投入されている。というよりも、風水から科学が生まれたと言える。方位、磁気、地球の回転軸などが発見され、緯度・経度のある地図をはじめて作ったのも中国だ。いわば地球科学の基本が風水にある。

もちろん、いまの科学で理解できないことも多いが、それは科学が二元論で成り立っているのに対して、風水は一元論だからだ。気は一つで同じ性質を持つと言っても科学では説明不能だ。とはいえ、人間の生活は一元論で成り立つ。私は今後、その部分に切り込んでさらに風水や一元論を説き明かしていきたいと思っている。